

第九話 蔵書が燃えてしまう

●坂崎重盛の隠れ書齋

私が尊敬するもの書きの一人に坂崎重盛さんがいる。東京下町生まれ、真性の江戸っ子で、著作には『東京読書』『東京文芸散歩』など、東京の町歩きをベースにしたもの多数。いま、一九四二（昭和一七）年生まれ、というプロフィールを見て驚いているのだが、七十近い人にはとても見えない。いつも身軽で、ひょうひょうとして若々しい。酒場や仲間の集まりなどでお見かけすると、ちょっと先輩ぐらいの感じの印象だ。

坂崎さんは、コレクターでもあり、本で言えば江戸東京もの、画家の随筆集、それにステッキやひょうたんをかたどった小物などを蒐集している。それを、自宅ではなく、わざわざ部屋を借りて置いているのだ。

私はお邪魔したことがないが、「dankai パンチ」（二〇〇八年六月号）「特集／いまこそ理想の書齋を手に入れる。」に、『超隠居』を楽しむエッセイスト」としてカラーグラビアとともに登場している。

記事（工藤博海）によれば、坂崎さんは市川市本八幡にアパートを一室借りている。ここに、本とコレクションを置いているようだ。本八幡は、坂崎さんが大好きな永井荷風が晩年を過ごした町（坂崎さんは「偶然」だと言うが）。六畳一間と四畳半のキッチン。家賃は四万円。

写真をみると、六畳間の中央に小さなちゃぶ台があるだけで、あとはぐるり、壁に本棚をめぐらせ、窓辺にはいろんな大小のひょうたんがぶらさがっている。そして方々にステッキが本を背に並ぶ。いかにも趣味人、といった部屋だ。

写された本棚を見ると、三田村鳶魚、平山蘆江がかなりの数を揃え、挿し絵や版画に関する著作や資料、カタログ、明治期から昭和初期ぐらいの旅行案内や旅行記など、的を絞った蒐集ぶりだ。純文学などといった無粋なものは、ここに置かれない。「粋筋」だけが集められている。古本好きで、コレクターで、町歩き好きというところは、「和」風の植草甚一、といった趣きもある。

自宅と仕事場の中間にある、電話を置かないこの部屋に、週に一、二度訪れる。ここで原稿を書き、本を読み、近所へ飲みに行き、そのまま泊まっていくこともあるそうだ。自分が住んでいる町以外に、自分独りになれる自由な部屋がある。これは、男の究極の憧れではないだろうか。そこに女性がいたら……いやいや、それは別にお金がかかるし、別の修羅を生む。男の趣味は「修羅」ぬきで行きたい。

●燃えたらすっきりする

木造のアパートに、本や木製のステッキ、ひょうたんの小物などだけが集められた部屋

は、見た目にも燃えやすいものばかり。取材者が「火事になったら大変ですね」と思わず聞いた、その返事がすごい。

「そうになったらそうなんですっきりするんじゃないかな」

坂崎さんは、おそらく本気でそう考えている。

コレクターにも、常軌を逸した「血道をあげる」タイプがある。家族を顧みず、金銭的にも時間的にも、ただ人生のすべてを「蒐集」にのみ費やす。蒐集する対象がすべてで、それ以外は目に入らない。そうした人が、もし火事でコレクションの全てを失ったら、それは「死」を意味するだろう。

坂崎さんはちょっと違う。目ざすは「隠居」で、コレクションはそれに付随して勝手についてきたもの、なのだ。そこに「蔵書の苦しみ」は見えない。狂気のコレクターではなくても、コレクションは集まると量的に空間を圧迫し、欠損を埋めるための「煩惱」も生まれる。大きな犬を散歩させている非力な小男のように、コレクションが力を持てば、それにふりまわされるようになる。

写真を見る限り、坂崎さんの隠れ書斎は、コレクション以外の調度や家電製品がない分、まだ余裕があり、空間的調和が保たれている。それに、坂崎さん自身が、ガツガツと飢えた蒐集家ではない。いつでも「振り出し」に戻れる。そうした恬淡さが、坂崎さんの魅力であり、それは文章にも表れているのだ。

燃えたら燃えたで、すっきりする。それで「蔵書の苦しみ」から解放される。

過激なように見えるが、蔵書家として覚悟すべき考え方もかもしれない。戦災、火災、地震による火災、あるいは津波による消失、じっさい、いつでも我が身に訪れるかもしれない。自分だけはだいじょうぶ、という根拠はどこにもない。

関東大震災、それに太平洋戦争をくぐりぬけた作家や評論家などの文章を読んでいると、彼らの多くが、火災で蔵書を焼失していることに気付く。

●偏奇館消失す

大物は一九四五（昭和二十）年三月十日の東京大空襲に被災した永井荷風。荷風は大正九年、麻布市兵衛町（現・港区六本木一丁目六番地あたり）の貸し地に、木造二階建ての洋館に住む。「麻布新築の家ペンキ塗にて一見事務所の如し、名づけて偏奇館といふ」と『断腸亭日記』に記述がある、この家を蔵書もろとも空襲で失うのだ。

「三月九日。天気快晴。夜半空襲あり。翌暁四時わが偏奇館焼亡す。」に始まる、その夜の冷静かつリアルな描写は名文として、さまざまなかたちで後の世に引用される。同日記によれば、荷風はその夜、窓辺に火の明るさを認めて、隣人の叫び声で空襲を知り、「日誌及草稿を入れたる手革包を提げて」庭へ出る。荷風はいったん家から離れるが、二十六年住んだ我が家の行方を見守るため、電信柱また立木の陰に立つ。他に比べ、自分の家がいつそう炎を上げるのは「これ偏奇館楼上少からぬ蔵書の一時に燃るがためと知られたり」な

どと書いている。

たしかに大量の蔵書は、いったん火がつくと、家屋をさらに燃やす燃料の役目を果たす。荷風のことだから、フランス文学の洋書や漢籍など、貴重な本をたくさん持っていたはず。またすぐ手に入るというような書物は少なかったろう。

荷風の蔵書がどんなものであったか、一端がうかがえる一文に「虫干」がある。一九一一年発表、というと明治四十四年。一九二〇年（大正九）年に移った偏奇館にも、これらの本があったと思われる。「毎年一度の虫干の日ほど、なつかしいものはない」と始まる文章で、「今年の虫干の昼過ぎ、一番自分の眼を驚かし喜ばしたものは、明治初年の頃に出版された草双紙や錦絵や又は漢文体の雑書であつた」と書く。これらは、漢詩人の父・久一郎の蔵書のようなのだが、おそらくそのまま荷風が受け継いだのではないか。

出てくる書名は、「東京繁盛記」、古河黙阿弥の著述に大蘇芳年の絵を挿入れた「霜夜鐘十時辻占」などの戯作、あるいは「新橋芸妓評判記」「東京粹書」「新橋花譜」といった色町のガイドブックなど。「大川筋の料理屋の変遷を知るに足るべき『開化三十六会席』と題した芳幾の錦絵」などもあった。

それが目の前で灰になっていく。どんな思いで見えていたか、知りたいところだが、感想は書かれていない。ただ、翌々日、燃え残りの灰のなかから、三つの品を掘り出す。「かつて谷崎君贈るところの断腸亭の印、楽焼の茶碗に先考の賞雨茅屋と題せしもの、また鷺津毅堂先生の日常手にせられし煙管なり」。

蔵書は家とともにすっかり燃えつくし、残ったのはこの三つだけだった。

●あとに残るは白い灰ばかり

植草甚一も、一九四四（昭和十九）年十一月二十四日の空襲に遭っている。一九〇八（明治四一）年生まれ植草は、このとき三十六歳。東宝宣伝部にいて、日比谷映画主任を経て、新宿文化映画へ移った頃。そのとき家にいなかった。翌日、溜池付近を歩いていたら、姉と遭遇し、そこで家が焼けたと知る。生家は日本橋小網町にあったが、関東大震災を機に両国瓦町へ移る。一九三五（昭和十）年に姉と青山に住む。空襲で焼けたのはこの家だろう。

「ただ油紙にぼくの大事な本を包んでいたのを庭の池へ、おっぼり込んだ。十冊ばかりでしたけれど、半分助かった」

機転のきく姉がいて助かったが、しかし、十冊では。しかも、そのうち無事だったのが「半分」となると心細い。中身は「全部エロ本」で、というのは植草一流の言い方で、ヘンリー・ミラーなどの文学書（当然、洋書だろう）だったという。

しかも、植草はこのあと、自分の家の焼け跡を訪ね、貴重な経験をしている。

「焼けた本の山は真白な灰の山でした。きれいでしたねえ。足をつっこんだら、ズブリと膝まで入っちゃった。まるで軽いケーキの中へ足をつっ込んだ感じがした」

本を全部焼いて、白い灰になったところへ、足をつっこむというのは、やろうと思ってやれることではない。しかし、そこに大切な蔵書を失った失望も後悔も感じられない。「きれいでしたねえ」というのは、実際そうだったのだろうが、負け惜しみか。それとも、茫然とした心境を、そんなふうに表示しているのか。

植草より八歳年上、一九〇〇（明治三三）年生まれの北川冬彦は、「馬」というタイトルを持つ「軍艦を内蔵している」という短詩で知られる詩人、映画評論家。東京空襲で蔵書を焼いた体験を「本の尊さ」という文章に書いている（『詩と随筆集 カクテル・パーティ』昭和二十八年）。短いので全文を引く。

「私に本が一冊もない、ということは有りえないことの筈であったがそれが現実に来たのだ。アメリカの焼夷弾が一夜で、私の数千冊の本を焼き尽したのである。

一冊も本がないということは、どんなに不安で空虚であるか。それは一冊も本がない環境に置かれず、想像出来ないことである。日本国中の本が全部焼かれたと感じたあのときでないと感じは出ない。疎開された本が残っているなぞと考え及ばない、目の前の本の灰の山を見詰めた者でないとわからない感じである。本はまさしく生命である。もはや、私は生ける屍だと感じた。

私は時機を失って一冊の本も疎開させていなかった。防空壕に入れてはべとべとになるのでその儘にしていた。たゞ一冊、本ともいえない古い千切れ千切れの仏和辞典が壕の荷物にまぎれ込んでいた。味気ない辞書のフランス語と日本語の一字一字が花よりも美しく、どんなに私を慰めてくれたことか。その記憶は今なお鮮かたで、私に本の貴さを反省させてくれるのだ」

書き写しながら、また感動してしまった。数千冊の蔵書の持ち主だったのに、「本が一冊もない」状態。その喪失感の深さ。そこへ、一冊だけ見つかった仏和辞典。本来、必要がなければ開かない「本」が、いまや貴重な一冊として、一字一字を慈しむように読む。その気持ち、わかるなあ。

ところで、植草のように、足をつっこんでみなかったにせよ、北川も、本が焼き尽くされた後の、白い灰の山を見ている。周りが焼けこげて火事場に残骸として残った本は目撃したことがあるが、すっかり灰になるまで燃えたということは、いかにアメリカの焼夷弾の威力が強かったかの証左だろう。

●なにより火事を恐れる男

私も夢のなかで、自室が消失し、それまで買い込んできた本が、すべて灰になった体験をしている。燃え盛る火が、帰宅途中の道すがら、遠目に見えて、まさか自分の住むアパートではあるまいかと近づいていくと、やはりそうだった。火事見物に集まった群衆のなかにまぎれて、ただ、具体的に「あの本」「この本」と、焼けて惜しまれる書名が脳裏に浮かんでくるのだ。北川は「一冊も本がないということは、どんなに不安で空虚であるか」

と書いているが、それはもともと、大量の蔵書を持っているからであって、「一冊も本がない」家はざらにある。持っているがゆえの「不安」であるし、失った「空虚」であるのだ。因果な話である。

トマス・グレイ研究などで知られる英文学者でエッセイスト、福原麟太郎が空襲で蔵書を焼いたかどうか、調べがついていないが、極度に火災による焼失を恐れた文章を書いている。「書籍と職業」というタイトルで、一九二九（昭和四）年「教育週報」に掲載された（随筆集『昔の町にて』所収）。

「僕は下宿屋にいる頃から、若し火事があったらどうしようという心配をいつもしていた」と書き出されるのだが、下宿生活をしていた学生時代から、火事を心配するというのは珍しい。なにしろ、外出して芝居などを観ている際中でも、家の本のことが気になるというのだ。

「火事となれば本は焼いてしまうより他ないと観念はしている。然し焼くのが惜しいという気は幾ら追っ払ってもついて来る」という。まあ、そうだろう。福原は東京高等師範英語科在学中から「英語青年」などに論文を執筆、卒業後、母校の助教授に就任し、一九二九年からロンドン大学、ケンブリッジ大学へ留学している。本好きの男だから、本場の書店や古書店で、英語の本をたくさん買い込んだらと思う。「書物が焼けることは最も惜しい未練の未練である」というのも、理由のあることなのだ。

同じ『昔の町にて』のなかに、ロンドンで古本屋通いをした楽しい体験が「ロンドンの古本屋」というタイトルで書かれている。ロンドンと言えば有名な古書街「チャリング・クロス」は「余り良い本屋があるわけではなく」とあっさり退け、横丁の裏町にある店や、あるいは大英博物館の近所の店、あるいはいっそロンドンから二時間も離れた「タムブリッジ・ウェルズ」という、平田禿木ひいきの浴泉地まで足を伸ばして、町外れの古本屋でかねて探していた『グレイ詩集』を見つけた喜びを書いている。こういう話はいつ読んでも楽しい。

そうして、海外で一冊一冊、値段を交渉しながら買い集めた本は、同じエディションの同じ版の本がのちに手に入るとしても、もうモノが違っている。思い出と一緒に染み付いてしまっているわけで、火事でそれを焼くということは、本にまつわる思い出も一緒に焼いてしまうということだ。キザに聞こえるかもしれないが、それは本に対して強い愛着を持たない者だからで、古書を含む数千冊の本を所有すれば、だれでもこの気持ちはわかるはず。

もう少し、「書籍と職業」の話が続きたい。福原はこうも書いている。

福原は一八九九（明治三十二）年生まれ。「若い頃」というのは明治の末年か、本箱が買えなくて、ミカン箱にホンを詰め、それを積んでいたという。

それを見た友人が「こいつあ火事の時に持ち出すのに都合がいゝな」と言った。普通なら、なんて縁起の悪いことを言うかと怒りそうなものだが、福原は違った。「あゝ彼も僕と

同じ病気にかかっているのだ」と親しみを覚えたというのだ。

●映画「華氏451度」でも本は焼かれた

「疑い深い性格の持ち主で、他人の陰口、なにかと聞き耳をたてた」

吹き替えなしのイギリス映画で、いきなり日本語による音声が流れ始めるので、一瞬「オヤ？」と思う。フランソワ・トリュフォーがイギリスに乗り込んで撮った映画「華氏451度」のラスト近いシーンである。

情報の共有はテレビのみで、新聞も本も読むことも売ることも禁止された管理社会を描く。国家が文学を否定するわけだ。原作はレイ・ブラッドベリ『華氏451度』。秘かに本を所有する者は、見つけ出されると「消防署」がただちに急行、目の前で焼き尽くされる。タイトルの「華氏451度」とは、自然に紙が燃え出す温度のことである。

読書家はついに本の所有をあきらめ、森の奥深くで隠れ住み、一人が一冊の本となる。つまり、自分で選んだ本を丸ごと一冊暗唱して、自分自身がその本と化すのだ。

「書物人間」となった彼らが、湖のほとりを歩きながら、一冊の本を暗唱する。たとえばそれはスタンダール『アンリ・ブリュエールの生涯』、ブラッドベリ『火星年代記』、オースティン『高慢と偏見』、マキアヴェリ『君主論』だったりするのだが、そのなかに、冒頭の日本語による作品も混じっている。

これがどの作品か。検索すると倉田百三『出家とその弟子』ではないか、という指摘があった。原作にはないから、トリュフォーの選択かもしれないが、最後に自分が一生をかけて暗誦する本に『出家とその弟子』を選ぶ日本人とはどういう人物か。

ともかく、この映画には、国家に反逆して本をあらゆる手段で隠し持つ人間と、盛大に本が焼かれるシーンが出てくる。消防庁で出世間近のモンターグ（オスカー・ウェルナー）は、あるとき、魔がさしたように本を手にとり、以後、本を焼く仕事に就きながら、本を読む二律背反の男となる。彼が最初に読む本はディケンズ『ディヴィット・カパフィールド』だった。

以下、次号へ